歳時世相篇 19

新たな祭りの創生競争
アフリカ、ザンビアにおける伝統の創造

人類学者の主要な研究対象のひとつである祭祀。多くの民族集団で構成されるザンビアでは1980年代以降、各民族が独自の祭りを創ることがブームとなっている。新しく生まれたこの「伝統」行事もまた、その生成過程を含めて、新たな研究対象になる。人にはなぜお祭りが必要なのか、自らにも問いかけてしまう

吉田 憲司（よしだ けんじ）
民博 文化資源研究センター

アフリカを中心に、仮面や儀礼、キリスト教の動向についてのフィールドワークを続ける一方、ミュージアム（博物館・美術館）における文化の表象のあり方を実践的に追究している。

南部アフリカのザンビアでは、一九八〇年代、主要民族が、「伝統をはじめよう」をスローガンに、競って民族単位の新たな祭りを生み出していった。

民族ごとに違う祭りが誕生

もともと、ザンビアには、民族をあげておこなうような祭りはほとんど存在しなかった。二〇世紀初頭以来続けられてきた祭りとして、わずかに北西部州ルンダ王国のウムトンボコや西部州のロジ王国の王宮の移動の祭りクオンボカが知られるだけであった。

後者のロジの王は、ザンベジ川の川岸と、川の中州の二カ所に王宮を有している。雨季と乾季で上下するザンベジ川の水位に応じて、中州の王宮と川岸の王宮の間を、王宮の資財や従者ごと、大きなボートにつんで、年に一度行き来することになる。クオンボカとは、そのための船団の移動を伴う大規模な祭りである。

こうした比較的古い祭礼と対抗するため、一九八〇年に東部州の民族ンゴニの人びとがンチュワラという祭りを再興する。ンチュワラは、その年の最初の収穫物を王に奉納する、いわゆる初穂の祭りである。

以後、一九八四年にその隣のチェワ人の祭りクランバ（収穫祭）、一九八八年ンセンガ人の祭りトゥインバ（雨乞いの祭り）など、数かずの祭りが創出されていった。

伝統をはじめよう

私は、一九八四年の第一回のクランバに立ち会った。「伝統をはじめよう」をスローガンに、本来は葬儀の際に踊られる仮面舞踊と、女性の成人儀礼の際に踊られる女たちの踊りを、それぞれの地域のチーフが王ガワ・ウンディに奉納するという、新たな祭りがつくりあげられた。

その折、村人たちと、「あと五〇年もして人類学者がやってきたら、きっとこの祭りがチェワの伝統的な祭りだと思い込むだろうな」と、笑いながら語りあったものである。

あれから二〇数年、すでにクランバは「チェワ伝統の祭りクランバ」と称されて、定着するにいたっている。

これに対して、チェワの隣に住むンセンガの人びとがつくりだした祭りトゥインバは、当時の王カリンダ・ワロが、自分で調査チームを立ちあげ、雨乞いについて古老から歌や伝承を集めて、自ら式次第を考え出した、まったく新しい祭りである。

差異化への志向

興味深いのは、こうした新たな祭りが、その時期と意味あいをそれぞれ別々のものになるように相互に差異化されている点である。

ンゴニのンチュアラは、その年の初めての実りを祝う儀礼であるから、雨季のさなかにおこなわれる。チェワのクランバは、収穫の祭りだから、乾季の初めに催される。そして、ンセンガのトゥインバは、雨乞いの祭りであるから、雨季を控えた乾季の終わりに開催される。

時期をたがえるのは、そのようにしないと、テレビで大きく報道されない、また、大統領や関係の大臣の臨席が仰げず、重要な陳情の機会を逃すといった事情からきている。政府も、直接資金を提供するということはなかったが、大統領・大臣の臨席をはかり、近隣の王、チーフたちの相互訪問のための交通手段を提供するといったかたちで、その動きを支援していく。

結果として、現在ではザンビアに七三あるといわれる民族集団のほぼすべてが、独自の祭りをもつようになっている。

次は博物館建設競争

こうした祭りの創生は、九〇年代に入ってひと段落する。そして九〇年代後半になると、今度は、各民族がそれぞれの民族の文化の展示を目的とした博物館の建設で競いあうようになる。祭りは一時的なものなので、そこで用いるような自分たちの遺産を、祭りを開く場所の近くで恒久的に展示しようという動きが巻き起こってきたのである。

ンセンガ人の祭り「トゥインバ」〈1993年 ザンビア、ペタウケにて〉

いち早く完成したのが、南部州のトンガ人の文化を対象としたチョマ博物館、そして前述の、船で王宮を移動する祭りクオンボカをおこなっているロジの人びとが川岸の王宮の隣に設けたナユマ博物館である。もともとジャン・ジャック・コベイルというカトリックの神父の手で集められた資料を収めたモトモト博物館は、一九七四年から国立の博物館のひとつになっているが、現在では、北部州ベンバ人のコミュニティ・ミュージアムとしての性格を強めている。

このほかにも、各地で続々と新たな博物館が建設されはじめている。先述のンチュワラの祭りを再興したンゴニの人びとは、地方行政府から払い下げを受けたホールを博物館に改装中である。

世界無形文化遺産に登録

一方、チェワの社会では、ニャウという仮面結社――筆者が加入している仮面結社である――の舞踊「グレワムクル」が、二〇〇五年、同じザンビアのルヴァレの人たちが継承している割礼儀礼にまつわる仮面舞踊マキシとともに、日本の歌舞伎などとならんで、UNESCOの「人類の無形文化遺産に関する代表的リスト」、いわゆる世界無形文化遺産に登録された。これをきっかけに、このチェワでも、またルヴァレでも、それぞれ祭りの場に博物館をつくろうという計画が動き出し、すでに設計図もできあがってきている。

世界遺産という制度にも後押しされるかたちで、このように、ザンビアでは、民族単位の博物館の建設競争がはじまっている。あと一〇年もすれば、祭りの場合と同様、またすべての民族集団がそれぞれの博物館をもつという状況が生まれそうな勢いである。